

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370736

研究課題名(和文) 英検・TOEFL・TOEICを用いた日本の大学英語科目単位認定の実態調査

研究課題名(英文) Using EIKEN, TOEFL, and TOEIC to Award EFL Course Credits in Japanese Universities

研究代表者

印南 洋 (Innami, Yo)

中央大学・理工学部・准教授

研究者番号：80508747

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本の大学英語科目では、授業を履修する代わりに、外部テストのスコアに基づいて単位を認定する場合がある。本研究は英検・TOEFL・TOEICを対象に、「単位認定対象の科目内容」と「単位認定時に用いるテスト内容」がどの程度一致しているかを調べた。

その結果、(1)各大学には、外部テストのスコアに基づき単位認定できる英語科目が58.5科目(中央値)あること、(2)単位認定が行われる約3分の1において、「単位認定対象の科目内容」と「単位認定時に用いるテスト内容」の間に相違がみられること、などが分かった。

研究成果の概要(英文)：Despite the wide use of language tests as a basis for awarding English language course credits at Japanese universities, little has been published about how universities set policies on awarding credits according to external test scores. To narrow this gap, the characteristics of such policies were investigated in relation to EIKEN, TOEFL, and TOEIC. Analyses of 18 national and 28 private universities showed that each university had a median of 58.50 EFL courses for which credits were offered based on external test scores. Moreover, approximately one third of cases of credit awarding showed a discrepancy between skills targeted in courses and those measured on the tests used in credit-awarding policies, suggesting that credit awarding based on these proficiency measures seems overall adequate. However, credit-awarding policies were problematic for four-skill (62.44% and 63.37% for national and private universities, respectively) and listening-speaking courses (61.26% and 65.29%).

研究分野：言語テスト、応用言語学、英語教育

キーワード：英検 TOEFL TOEIC 単位 認定 単位認定 外部テスト

1. 研究開始当初の背景

(1) あらゆるテストは特定の使用目的のために作成されており、当初の目的外で使用するには注意深く検討する必要がある。英検は主に国内で実施され、多様なトピックを測り、4技能(読む、聴く、書く、話す)を測り、テスト結果は一般・推薦入試優遇、海外の一部の大学への入学選考資料、単位認定として使われている。TOEFL・TOEICは国内外で実施され、TOEFL iBTは一般のおよびアカデミックな英語を対象に4技能を、TOEICは主にビジネスで使われる英語を対象に2技能(読む、聴く)を測る。TOEFLの本来の使用目的は主に北米の大学への入学選考資料であるが、日本国内では一般・推薦入試優遇、クラス分け、進級・卒業条件、単位認定に使われている。TOEICは一般・推薦入試優遇、クラス分け、進級・卒業条件、国内企業での就職選考資料、単位認定などとして使われている。

(2) ここに大きく問題が2つある。第1に、英検・TOEFL・TOEICの本来の使用目的には、日本の大学の英語科目の単位認定は入っていない。本来の使用目的以外のためにテストを使用する場合は、その適切さを検証する必要がある。例えば、スピーキング能力を直接的には測定しないTOEICを用い、スピーキングクラスの単位を認定するのは、適切とはいえない。また、一般的場面とはいえずビジネスの内容を多く含むTOEICを用い、academic skill Englishクラスの単位を認定するのも、適切とはいえない(但し何らかの根拠に基づく場合は別である)。単位認定を適切に実施することは大学の認証評価基準に関わり、重要な問題である。認証基準に適合と判断される場合でも、(1)単位認定はカリキュラム全体の中で判断されるため、見過ごされることがある、(2)単位認定についての具体的な記述は大学認証評価書内にあまり見られず、各大学でどの程度適切に単位認定が行われているか不明である。第2に、対象とする場面(一般・学術的場面)、測定技能、本来の使用目的(熟達度測定、入学選考資料)を考慮すると、英検・TOEFL・TOEICは広く使われているテストだが同質とみなせるテストではない。しかし現実には、各テストが交換可能であるかのように使われることが多い(Fulcher & Davidson, 2009; O' Loughlin, 2011)。本研究では英語教育において幅広く使われるが異なる能力を測る3つのテスト(英検・TOEFL・TOEIC)が単位認定時に交換可能であるかのように使われているかを明らかにする。

(3) 大学英語科目の単位認定に関する先行研究は少ないが、TOEFL・TOEICを用いた単位認定について安間(2011)が、TOEFL iBTを用いた単位認定について国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部TOEFL事業部・©2012 国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部(2012)

がある。安間(2011)は348大学における1075の単位認定条件を調べ、TOEFL・TOEICの換算単位数は2単位が最も多く(33%)、4単位(29.9%)、6単位(12.9%)、8単位(10.2%)の順で少なくなることを示した。また、単位認定に必要なTOEFL・TOEIC基準スコアの平均値を報告している(例:2単位認定に必要なTOEFL基準平均スコアは484.79)。国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部TOEFL事業部他(2012)は162大学における435の単位認定条件を調べ、単位認定に必要なTOEFL iBT基準スコアを大学ごとに記載している。

(4) このように単位認定に関する研究は行われてきたが、以下3点の限界点がある。第1に、両先行研究共に、単位認定数および単位認定に必要な基準スコアの記述にとどまり、より重要な点である「単位認定対象の科目内容との関連が適切か」は未解明である。第2に、両研究ともに同じアンケート調査データに基づいていると思われ、アンケートの回答率は387校(51.4%)と高めであるが、得られた回答がどの程度日本の大学全体を代表しているか不明である。回答は各大学に委ねられているため、単位認定に積極的な大学ほど回答を寄せた可能性がある。第3に、日本国内で最も受験者が多い英検を対象とした単位認定に関する研究は行われていない。

(5) これらの限界点を克服するために、本研究を行う。第1に、「単位認定対象の科目内容」と「認定時に用いるテスト内容」がどの程度一致しているかを調べ、日本の大学英語教育における単位認定がどの程度適切に行われているかを解明する。第2に、日本の大学全体を代表するように大学を抽出し、抽出した大学のホームページから単位認定に関わる資料を収集する。第3に、TOEFL・TOEICに加え、英検を研究対象に含める。第4に、協力者への聞き取りを行い、単位認定制度が実際にどの程度使われているかを調べる。第5に、より大きな視点からは、テストが実社会においてどのように使われているかを調べる研究は必要だが、現在まであまり行われていない(e.g., Bachman & Palmer, 2010)。本テーマを本研究では扱い、単位認定の適切さに関する具体的な示唆を与える。

2. 研究の目的

(1) 日本の大学英語科目では、授業を履修する代わりに、外部テストのスコアに基づいて単位を認定する場合がある。しかし各大学が具体的にどのように単位認定を行っているかは未解明である。本研究の目的は日本の大学英語科目における単位認定時に、英検・TOEFL・TOEICがどのように使われているかを包括的に調べることである。具体的に以下2点を調べた。

問A: 「単位認定対象の科目内容」と「単位認定時に用いるテスト内容」がどの程度一

致しているか？

問 B: 不一致にも関わらず、単位認定が行われる理由は何か？

3. 研究の方法

(1) 問 A を調べるため、日本の大学全体を代表するように大学を系統的に抽出した。抽出した大学のホームページ上で、単位認定に関わる資料を検索収集した。具体的には、(1) 単位認定基準が分かる資料、(2) シラバス、(3) カリキュラム構成(学則、履修規定、履修要項、卒業要件、最低修得単位)が分かる資料である。資料(2)と(1)もしくは(2)と(3)を比べ、単位認定の適切さを「単位認定対象の科目内容」と「単位認定時に用いるテスト内容」の一致度の点から判断した。抽出した大学ごとにこの手順を繰り返した。収集後、分析に十分な資料がある大学は、18 の国立大学と 28 の私立大学であった。

(2) 問 B を調べるため、これら 46 大学を対象に各大学から教員 1 人にアンケートを実施した。その結果、25 人(国立大学 13 人、私立大学 12 人)から回答を得ることができた。

4. 研究成果

(1) 問 A について、これらの大学のホームページで公開されているシラバスや単位認定に関する文書を分析した。その結果、(1) 各大学には、外部テストのスコアに基づき単位認定できる英語科目が 58.5 科目(中央値)あること、(2) 単位認定が行われる約 3 分の 1 において、「単位認定対象の科目内容」と「単位認定時に用いるテスト内容」の間に相違がみられること、(3) 不一致は特に 4 技能科目(国立大学での単位認定の 62.44%、私立大学での単位認定の 63.37%)、リスニング・スピーキング科目(国立大学での単位認定の 61.26%、私立大学での単位認定の 65.29%) で多いことが分かった。

(2) 問 B について、不一致にもかかわらず単位認定を行う理由は、学生への動機付けとなるため、英語力全体を測るため、他大学で同様に行われているため、であることが分かった。

(3) 研究の結果、以下 4 点が示唆できる。第 1 に、テスト使用者である大学の担当者は、各テストが何を目的として作成されているかについての理解を深めることが重要である。テスト作成者は、ワークショップやセミナーを開いて援助できるだろう。第 2 に、「単位認定対象の科目内容」と「単位認定時に用いるテスト内容」の間に相違がある場合、単位認定を行う担当者は単位認定方針を改訂すべきである。具体的には、(a) 科目内容に一致するテストのみを使う、(b) 相違がある部分を新たにテストして補う(スピーキング科目の単位認定を TOEIC リスニング・リー

ディングで行いたいときは、スピーキングテストを大学で新たに課す)、(c) 通常の授業は行わず、外部テストで単位認定を行う専用の科目を新たに作る、がある。第 3 に、該当科目の担当者に、外部テストにより単位が認定されることを周知することである。ただし、テスト対策のクラスでない限りは指導内容を狭める恐れがあるので、使用教科書を自由に選ぶ権利を与えるなどの自由度が同時に必要だろう。第 4 に、単位認定を行う各大学は、認定基準の適切さを検証し続けることである。例えば TOEFL PBT でライティング科目の単位認定を行う場合、何点以上を求めるべきか、エッセイなどのライティング課題を新たに課すべきか、などを検討すべきである。

(4) 今後必要なことは、第 1 に授業を観察しシラバス通りの内容が行われているかを調べること、第 2 に該当科目を履修し単位を得た学生と、外部テストで単位を認定された学生に、該当科目の授業内容に基づくタスクを実施し結果に違いがあるかを調べること、第 3 に単位認定が実際にどの程度実施されているかを調べること。

<引用文献>

Amma, K. (2011). Eigo nōryoku tesuto to sono riyō [English language tests and their use]. In S. Ishikawa, M. Nishida, & C. Saida (Eds.), *Tesutingu to hyōka* [Language testing and assessment] (pp. 144-172). Tokyo: Taishukan.

Bachman, L. F., & Palmer, A. S. (2010). *Language assessment in practice: Developing language assessments and justifying their use in the real world*. New York: Oxford University Press.

Council on International Educational Exchange. (2012). *TOEFL iBT tesuto sukou riyō jittai chōsa hōkokusho* [Use of TOEFL test scores: Entrance examinations and credit awarding at national technical colleges and universities, and test use at boards of education]. Retrieved from <http://www.cieej.or.jp/toefl/toefl/scorereport2012.pdf>

Fulcher, G., & Davidson, F. (2009). Test architecture, test retrofit. *Language Testing*, 26(1), 123-144. doi:10.1177/0265532208097339

O'Loughlin, K. (2011). The interpretation and use of proficiency test scores in university selection: How valid and ethical are they? *Language Assessment Quarterly*, 8(2), 146-160. doi:10.1080/15434303.2011.564698

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

(1)In' nami, Y., & Koizumi, R. (2016). Task and rater effects in L2 speaking and writing: A synthesis of generalizability studies. *Language Testing*, 33, 341-366. (SAGE Publications, UK & USA) doi:10.1177/0265532215587390 査読有

(2)Koizumi, R., In' nami, Y., Asano, K., & Agawa, T. (2016). Validity evidence of Criterion® for assessing L2 writing performance in a Japanese university context. *Language Testing in Asia*, 6(5), 1-26. (Springer, Germany) 査読有

[学会発表](計6件)

(1)In' nami, Y., Jeon, E. H., & Koizumi, R. (2017, March). L2 speaking proficiency and its features: A meta-analysis. Paper presented at the American Association for Applied Linguistics 2017 Conference, Portland, Oregon, USA. (March 20, 2017)

(2)Jeon, E. H., In' nami, Y., & Koizumi, R. (2016b). L2 speaking proficiency and its correlates: A meta-analysis of correlation coefficients. Paper presented at the 35th Second Language Research Forum (SLRF 2016). Teachers College Columbia University, USA. (September 23, 2016)

(3)In' nami, Y., & Koizumi, R. (2016). Awarding EFL credits using EIKEN, TOEFL, and TOEIC in Japanese universities. Paper presented at the 20th JLTA Annual Conference, Kanagawa, Japan. (September 18, 2016)

(4)Koizumi, R., In' nami, Y., & Fukazawa, M. (2016). Effects of four-month paired-oral-type instruction and assessment on the development of L2 speaking ability of Japanese university learners of English. Paper presented at the Pacific Second Language Research Forum 2016, Tokyo, Japan. (September 11, 2016)

(5)印南洋・小泉利恵・仲村圭太. (2016). 日本人英語学習者の4技能レベルのずれの特徴 TEAPとTOEFL iBTの場合. 全国英語教育学会第42回埼玉研究大会. (August 20, 2016)

(6)Jeon, E.-H., In' nami, Y., & Koizumi, R. (2016a). L2 speaking proficiency and

its correlates: A meta-analysis. Paper presented at the American Association for Applied Linguistics 2016 Conference, Orlando, Florida, USA. (April 11, 2016)

[図書](計2件)

(1)Koizumi, R., In' nami, Y., & Fukazawa, M. (2016). Multifaceted Rasch analysis of paired oral tasks for Japanese learners of English. In Q. Zhang (ed.), *Pacific Rim Objective Measurement Symposium (PROMS) 2015 Conference Proceedings* (pp. 89-106), Springer. (Springer, Germany)

(2)Koizumi, R., In' nami, Y., & Fukazawa, M. (2016). Development of a paired oral test for Japanese university students. *British Council New Directions in Language Assessment: JASELE Journal Special Edition*, 103-121.

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
印南洋 (INNAMI, Yo)
中央大学・理工学部・准教授
研究者番号: 80508747

(2)研究分担者 ()

研究者番号:

(3)連携研究者
小泉 利恵 (KOIZUMI, Rie)

順天堂大学・医学部・准教授
研究者番号：70433571

(4)研究協力者 ()